

ボランティアに関する報道にあたってのお願い

～ その表現、適切ですか？～

ボランティア派遣・ボランティア活用編



■ 「表現」にこだわる意味 ～本パンフレットで目指すもの■

報道関係者の皆さま 平素は、各地で活動するボランティアの活躍を丹念に取材いただき、幅広い側面から活動の内容や課題などを報道いただき、ありがとうございます。

また、ボランティアセンターなどボランティア活動推進団体の皆さま さまざまな場で市民の主体的な社会活動への参加を進める取り組みへのご尽力に敬意を表します。

さて、今やその言葉を聞かない日はないと思えるほど多種多様な分野で活動する「ボランティア」。活動の内容や成果を報道いただくことでやりがいやパワーをいただける一方で、使われる言葉や表現によって、ボランティアの気持ちが萎えたり、ボランティア活動の価値が誤解されてしまう場合があります。また活動推進の場面でも、その表現によって主体的であるはずのボランティアが従属的な立場とされ、その活動の魅力が伝わらない場合もあります。

当協会では2025年4月に「奉仕」と「慰問」の表現について取り上げるパンフレットを作成しましたが、今回は「ボランティア派遣」「ボランティアの活用」という表現について取り上げました。いずれもボランティア活動の本質を歪めかねない表現だと考え、これらの表現に代わる提案をさせていただきました。報道機関の立場では、活動を推進する側がこれらの表現を使っているのご意見もあると考え、今回のパンフレットでは活動推進団体にもメッセージを届けたいと考えました。

言葉 — 魂を持った表現としての言葉は、ほんの小さな違いでも、時として本質を歪め、その価値を違えてしまうことがあります。そもそも私たちは言葉を使って物事を考えますから、表現によって物事の捉え方自体が変わってくることもあります。そこで、今回、新たに上記の2つの表現について、私どもの懸念をお伝えします。

大勢の人々に情報を伝える報道機関の皆さまや活動推進の最前線に立つ皆さまが、ボランティア活動に関する報道やメッセージを発する際に、このパンフレットが少しでもお役に立てれば幸いです。

2026年4月

認定特定非営利活動法人 日本ボランティアコーディネーター協会
代表理事 栗木 梨衣

目 次

「表現」にこだわる意味	2
「ボランティア」という言葉の意味	3
「派遣」という表現によってボランティアを従属的存在にしてしまいませんか？	4
ボランティアは、誰かに「活用される」存在ではありません！	6
JVCAについての紹介	7

「ボランティア」という言葉の意味

●言葉の由来

まず、言葉の本来の意味をご紹介します。「ボランティア」は、英語のvolunteerに由来する外来語です。この英語は「自分から進んで～する」「喜んで～する」を意味するラテン語volo（英語のwillに対応する言葉で、ウォロと読みます）を語幹に、人を示す接尾辞「er」を加えて生まれた言葉です。

もっとも活動の発端は、「放っておけない!」という強い思いから始まる時もあれば、「自分を活かせる場を得たい」とか「一度、普段と違う世界をのぞいてみたい」という好奇心が起点の場合もあります。時には断りづらく渋々参加した活動の場で、その魅力に気づき、熱心に活動を始めたという方も大勢います。いずれにせよ、心の内側から湧いてくる意欲によって取り組まれる活動です。

●ボランティア活動の3要素

このボランティア活動を定義する要素は「やる気・世直し・手弁当」、つまり自発性（自主性）、社会性（公益性・公共性）、無償性の3点で整理されるのが一般的です。

- ・ **自発性（自主性）**：自発的とは「言われなくてもする」ことですが、同時に「言われても（自らが納得しなかったら）しない」ことでもあります。強制の対極にあるわけで、するかしないか、どのようなペースで、何のテーマに取り組むか、始めることも止めることも、自分自身で自由に決められる活動です。
- ・ **社会性（公益性・公共性）**：効果が開かれている公益活動です。ただし、行政とは異なり、自ら選んだ特定のテーマに特化して活動することができます。その形態はさまざまで、政策提案などの運動を進める活動もあれば、スポーツや音楽などを広く楽しむために取り組まれる価値創造型の活動もあります。
- ・ **無償性**：金銭的報酬を期待する活動は含めませんが、活動に伴う交通費や食費などを受けることは実費弁償と呼ばれ、無償の取り組みに含めるのが一般的です。身銭を切って取り組まれるがゆえの発信力、対価との交換に還元されない営みとなることなど、無償であるがゆえの強みもあります。

要は、公益のために無償で取り組まれる活動であっても、戦時中、強制的に動員させられた「勤労奉仕」などは、ボランティア活動とは呼べません。こうした活動と対比するために、外来語が使われているとも言えます。

●自発性を大切にす意味

3要素の中で特に重要なのが「自発性」。この特性は以下のようなボランティア活動の長所を生み出す源泉です。

- ・ **機動性を生み出す**：災害時などに注目されるボランティアの機動性は、自発的だから生まれます。ボランティアは自らの発意とフットワークで、容易に機動的な活動を進めることができます。
- ・ **「温かさ」を生み出す**：特定のテーマや対象を選べるわけですから“他ならぬあなた”のために心を込めて特別な関わりをすることもできます。だから、家族や友人と同様に、温かい関わりができます。
- ・ **多彩な活動を生み出す**：個々人の関心や能力を生かすことで、結果として多彩な活動が生み出されます。社会の多様なニーズに応えることで、多様性を認め合う社会を築くことにもつながります。
- ・ **新たな活動を創造する**：現状を改革し、未知の取り組みや開拓的な方法に果敢に挑戦することも容易です。結果に対する責任を自ら引き受け、試行錯誤と創意工夫を重ね、新たな活動を創造していきます。
- ・ **自治の主体を育む**：お役所任せにして、問題意識が不満に転嫁し、クレームをぶつける。そんな「お客様化社会」化が進む中、社会の課題解決に直接関わることは、自治の主体となる体験でもあります。
- ・ **活動者自身が元気になる**：様々な人々と共感でつながり、自身も主体となって課題を解決し活動を創造していける体験によって自己有用感が高まり、ボランティア自身の健康寿命が延びたりします。

ボランティア活動が自発性を核とする活動であることに、私たちはこのような意味を見出しています。

「派遣」という表現によってボランティアを従属的存在にしてしまいませんか？

私たちの提案

災害など現地で活動するボランティアに対しては、「派遣」ではなく「参加支援」「送り出し」「紹介」などの表現を使いましょう。



こんな場面で「ボランティア派遣」が使用されています

- ・災害ボランティアセンターで、応援を求める被災者にボランティアを派遣
- ・ちょっとした困りごとの対応に、学生ボランティアを派遣
- ・被災地へのボランティア派遣、追いつかず

■問題点はここにあります

「派遣」という言葉の「派」には派出や派兵のように「一部を分けて行かせる」の意味があり、「遣」は「つかわす、差し向ける」の意味であり、「派遣」は「ある任務を負わせ、命令して一時的に差し向けること」となります。

実際、辞書でも「派遣」は「①諸方へ分けて送り遣わすこと。②命じて出張させること」（『広辞苑』第7版）、「任務を負わせて、他の場所に行かせること」（『大辞林』第4版）と、使役形で説明されています。

誰かに命じられるかどうかにかかわらず自ら主体的に行動を起こしたり、現地に赴いたりする人たちがボランティアですから、そのボランティアに対して「派遣する」という表現を使うことは適切ではないと私たちは考えます。

「ボランティア派遣」という表現では、ボランティアが「指揮されて活動している」「やらされている」「業務（有償スタッフ）として、その現場に携わっている」といった誤解を生むこともあります。「自分の意志でやっているのに……」と、実態と報道や表現内容の違いにショックを受けるボランティアがいることも事実です。

■解説：「参加支援・送り出し・紹介」と表現する意味

派遣する・派遣されるという関係は、そこに指揮命令や主従の関係を読み取ることができます。業務としての派遣であれば派遣元との雇用関係（金銭を介した指揮命令関係）、授業という枠組みの中であれば単位取得に関係する教員との評価する／されるの関係があるでしょう。このような義務や強制の力が働く場においては「派遣」という表現が使われることもあります。しかし、ボランティアはあくまでも活動の主体ですから、「派遣」という表現を避けることが望ましいと言えます。

また、ボランティア活動の背景には、ボランティア一人ひとりの異なる背景や思い、意志が存在することを忘れてはなりません。「派遣」という表現が用いられると、活動する側が客体の立場に置かれ、一人ひとりの特別な思いや大切な気持ち（意志）をもって活動に関わっていることが伝わりにくくなってしまいかねません。顔や名前が出る報道や報告であれば、なおさらです。

ここで大切にしたいのは、実態に合わせた表現の使い分けです。ボランティアが集うフィールドには、派遣された有給・有償のスタッフも多くいます。その皆さんとボランティアとは関わり方が異なるのに、一括りにして混同させてしまうことが、誤解の元になりかねないのです。

「ボランティア」と「派遣」は本質的にすれ違う言葉だからこそ、まずはその活動の当事者が本当にボランティアなのかを見極めたいものです。そして、それがボランティアなのだとしたら、あくまでも自発的な参加の後押しである「送り出し」や「紹介」「参加支援」といった表現を積極的に用いてほしいと思います。

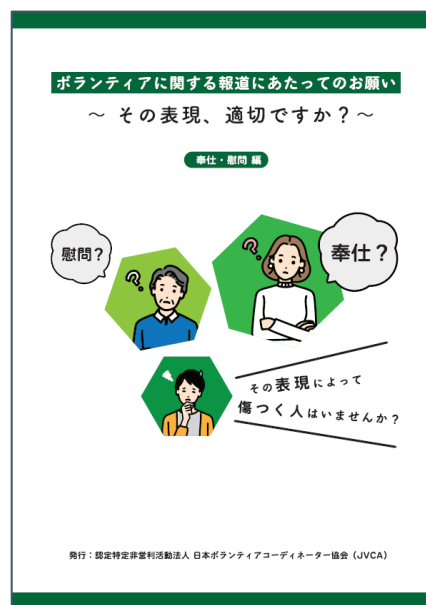
●INFORMATION●

『ボランティアに関する報道にあたってのお願い ～その表現、適切ですか？～(奉仕・慰問編)』

<発行> 2025年4月

<目次>

- ・「表現」にこだわる意味
- ・「ボランティア」という言葉の意味
- ・「奉仕」という表現では、
「ボランティア」のもつ活動の広がりを見せません
- ・「慰問」という表現では、
上下関係を想起させるイメージが伴ってしまいます
- ・JVCA についての紹介



【奉仕・慰問編】は、左のQRコードか、
日本ボランティアコーディネーター協会のWebサイトの
以下のページからご覧いただけます

<https://jvca2001.org/wp/wp-content/uploads/2025/04/Advocacy-for-the-Press-.pdf>

ボランティアは、誰かに「活用される」存在ではありません！

私たちの提案

ボランティアはより良い社会をつくる「主体」であり、「活用」される資源ではありません。
ボランティアの力を「活かす(生かす)」「促す」「促進する」「活発に活動できる環境を整える」などの表現を使いましょう。



こんな場面で「ボランティアの活用」という表現が使用されています

- ・ ボランティアを活用してイベントを成功させよう
- ・ 地域づくりの担い手としてボランティアを活用することが望まれる
- ・ 職員不足を補うためにボランティアを活用したい

■問題点はここにあります

ボランティアは人に命令されて行うものではなく自ら選んでおこなう活動です。しかし、「活用」には、『活かして用いること。効果のあるように利用すること』（『広辞苑』第7版）という意味があります。ボランティアの特性が「十分に発揮できる」のなら良いことではないかと思われるかもしれませんが、しかし、問題は「用」という語とセットとなっていることです。

そもそも「用いる」には、『人の能力を評価してある職・地位につかせる。登用する』（『大辞林』第4版）という意味があり、主体はあくまでも用いる側で、安価な労働力としてうまく使おうという意図が伺える表現となります。上記 広辞苑での「活用」の解説で「利用する」とあるのは、まさにこの点を端的に示しています。

人がボランティア活動を始めのきっかけは多様です。本人の強い思い（共感）から始まる場合もあれば、興味や好奇心から始まる場合もあります。また、人から誘われる場合もあるでしょう。しかし、いずれの場合も、ボランティアは活動の対象を自ら選択し納得しなければ活動は始まりません。

ところが「活用」は、「活用」したい側の都合や思惑が優先し、ボランティアを客体化した表現になります。

また、近年は財源のひっ迫を背景に、ボランティアを“資源や担い手”に「活用」することを前提とした制度設計も少なくありません。

■解説:ボランティアは資源として利用されるものではありません

ボランティアは誰かに活用されるための資源ではなく、よりよい市民社会づくりに自ら参加する「主体」であり、一人ひとりが地域活動の「主人公」です。だからこそ、ボランティアコーディネーターはボランティアを「活用」するのではなく、ボランティア一人ひとりが活動現場で自分のチカラを発揮できるように応援しています。

そのことを市民に伝える報道機関や人権を保障するための施策を進める行政機関、さらに市民の社会参加を進める活動推進団体などでは、「ボランティアを活用する」などの“物のような扱い”をした表現は避けるべきだと思います。

そこで、ボランティアの力を「活かす(生かす)」や、ボランティアの特性が発揮されるように「促す」「促進する」、さらには「活発に活動できる環境を整える」などの表現を使うことをおすすめします。

●参考文献●

『ボランティアコーディネーション力公式テキスト 第3版 ～市民の社会参加を支えるチカラ』
2024年、日本ボランティアコーディネーター協会編、早瀬昇・筒井のり子著、中央法規出版刊
『広辞苑 第7版』2018年、岩波書店
『大辞林 第4版』2019年、三省堂

●ボランティア報道アクションチームについて●

本パンフレットの記事作成にあたっては、日本ボランティアコーディネーター協会の有志が集って「ボランティア報道アクションチーム」を組織し、事例検証、アンケート調査、報道機関関係者との意見交換、研究集会での分科会設定による意見交換などを経て、内容を検討してきました。

同チームで作成した素案は、全国のボランティアコーディネーションに関わるメンバーで構成する運営委員会での議論を経た後、理事会での審議を経て、成文化されました。

<チームメンバー>

石黒 建一(社会福祉士事務所 代表)
齋藤 元気(大学ボランティアセンター ボランティアコーディネーター)
清水 由子(生涯学習施設 ボランティアコーディネーター)
高橋 義博(市民活動センター スタッフ)
田口 雄一(NPO法人 副理事長)
竹脇 恵美(地域自治協議会 教育文化委員長)
橋詰 勝代(社会福祉協議会 職員)
早瀬 昇 (市民活動推進団体 理事長)
疋田 恵子(社会福祉協議会 職員)

日本ボランティアコーディネーター協会(JVCA)とは

日本ボランティアコーディネーター協会(英語名 Japan Volunteer Coordinators Association: 略称 JVCA)は、2001年1月に発足し、同年8月に特定非営利活動法人の認証を得た市民活動推進団体です。2014年には認定特定非営利活動法人として認定されました。

JVCAでは以下の5つを事業の柱としてさまざまな取り組みを行っています。

- ① ボランティア魅力と可能性を伝える
- ② ボランティアコーディネーションの機能を普及させる
- ③ ボランティアコーディネーターのネットワークの確立
- ④ ボランティアコーディネーターの専門性の向上
- ⑤ ボランティアコーディネーターの社会的認知の促進

コーディネート(coordinate)には“対等にする”“同格にする”という意味があります。

JVCAは、多様な人や組織が相互に対等な関係でつながり、新たな力を生み出せるように調整することで、一人ひとりが市民社会づくりに参加することを可能にする働き＝ボランティアコーディネーション力の普及・向上に努めています。

書名 ボランティアに関する報道にあたってのお願い

～ その表現、適切ですか？～【ボランティア派遣・ボランティア活用編】

発行 認定特定非営利活動法人 日本ボランティアコーディネーター協会(JVCA)

編集 JVCA ボランティア報道アクションチーム

発行日 2026年 4月25日

発行所 認定特定非営利活動法人 日本ボランティアコーディネーター協会(JVCA)

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-13 末よしビル別館30D

TEL:03-5225-1545 FAX:03-5225-1563

Email: jvca@jvca2001.org

Web: <https://jvca2001.org/>